

評曰、春宵寫し出して價更に千金

青柳の色なほ淺き春の日に深くも白ふ紅梅の花

### 同會席上和歌

思邪なしといふことを

三輪山にありてふ杉の一本の直さを人の心ともかな  
照る月の影もやとらん秋萩に置く白露の濁らさりせは  
風なくはもとの姿のあらはれて垂る柳もすなはなるへき

評曰、よくもよまれたるかな

遙峰帶晚霞

くれいそく鐘の音ひびく遠山の峯々かすむ春の夕は  
夕餉たぐ煙の末か目もはるにかすみかけたる遠の山々

若木の花

いかはかり咲きさかゆらむ若櫻けふを千とせの始とはして  
せりなつなまた色淺き春の野にはつ咲き出つる稚子櫻哉  
いく春もかくて散らなむ稚子櫻花のかほりをあとに残して  
わか宿の若木の櫻このともしも遅れじものと咲き出にけり  
時來れば花咲きいでぬおのつから宿の若木も春や知るらむ

溪川

無名

基紀

芝峯

山川

基紀

題えらす

龍田山たつ春風に世の中の人々の心を吹かせてしな  
か阿蘇かねの風吹きあれて飽田野の里わの梅にふる霞かな

評曰、これらを見挫棘さやいふへからん

紅葉か丘にて會えけるに師の君のおそかりければ

春の日のな。かしどもなし師の君を心々に待ちわひをれば

雑歌

折にふれて

浦鹽の浦風までも敷嶋の大和の春はのとけからまま

評曰、外國人の方より讀める様なり

新年雪

のどかにも積る雪かなあま玉の年立つ朝は風たにもなく

若菜

春の野に若菜摘にとゆく子らの心やいかにのとけかるらん

春興

のとけまや霞の奥に行きくれて花の影かる春の心は

曉霞

溪川

桃江

奇熊

基紀

清泉